

『俊頼髓脳』における歌語注釈の方法

家 永 香 織

はじめに

近時、『口伝和歌抄』『疑開和歌抄』など従来知られなかった作品が紹介されたが、「四条大納言歌枕」をはじめとして逸文しか残らない歌学書は少なくない。したがってあくまでも現存する文献に限っての指摘となるが、『歌経標式』『喜撰式』あるいは「四条大納言歌枕」『能因歌枕』という呼称が示すように、初期の歌学書は歌体論・歌病論が中心の「式」であり、平安中期には和歌に詠まれる地名の集成や歌語注釈を主体とする歌枕が編まれるようになる。⁽¹⁾そして院政期に至り、『口伝和歌抄』『隆源口伝』『綺語抄』等より詳細な歌語注釈書が陸續と成立するのである。

その流れの中にあつて『俊頼髓脳』は、歌体・歌病を論じ、詠歌技法・題詠論・秀歌論などの詠歌理論を展開し、歌話を語りつつ歌語や和歌そのものの注釈もする。先行歌学書が取り上げなかった連歌も多数収載する。⁽²⁾当時としては画期的な総合的歌学書と認めてよいだろう。⁽³⁾

本稿は、そうした総合的内容の中で、歌語や和歌に関する注釈の部分を取り上げる。この部分は『俊頼髓脳』全体のほぼ半量を占め、同時代歌学書との重複も多い。語義の注解、歌語にまつわる逸話や故事、詠歌状況の説明など内容は

様々であるが、本稿ではこれをまとめて便宜的に「歌語注釈」と称することとする。いわゆる短連歌集成記事を挟み前後に展開される部分であり、日本歌学大系本で言えば、一五五頁一五行目から一九六頁四行目（「歌語注釈①」とする）と、二〇四頁六行目から二二三頁一〇行目（「歌語注釈②」とする）に相当する。以下、この歌語注釈部分について、様々な角度からその特色を探っていききたい。

一 配列

後掲の別表（七九頁）は、歌語注釈部分で取り上げられている歌語ごとに、前後項目との関連、内容、例歌の出典を整理したものである。一つの項目に複数の歌語があるのは、例えば「にほ鳥のかつしか早稲をにへすともそふかなし（その）
きを外に立てめやは」という歌をあげる1のように、複数の歌語をまとめて注解している場合である。また55の「かつみ」と「花がたみ」や61の「放ち鳥」と「浜千鳥」のように、類似した歌語を関連づけながら説明している場合も一項目にまとめた。太字の見出しは、俊頼にその歌語を詠んだ作例があることを示している。⁽⁴⁾ 内容欄は凡例の通りだが、明瞭な線引きが難しい例もあり傾向を把握するための目安として示した。歌の出典に関しては、勅撰集と『古今和歌六帖』両方に採られている場合、勅撰集名のみを記した。

まず、配列の特徴から見ていきたい。同時代から鎌倉期成立の歌語注釈を含む歌学書で完本が存するもののうち、『綺語抄』『和歌童蒙抄』は類書的分類であり、『綺語抄』は天象部、『和歌童蒙抄』は天部から始まる。『奥義抄』『和歌色葉』は所収歌集ごとに和歌をあげて注文を記しており、『奥義抄』は『後拾遺集』、『和歌色葉』は『万葉古歌付伊勢物語六帖近比歌』から始まる。『色葉和難集』は歌語をいろは順に配列し、まさに歌語辞典というべき形式である。これらに対して、『口伝和歌釈抄』『隆源口伝』『袖中抄』の配列には特段の規則性は見出せない。

『俊頼髓腦』の歌語注釈もまた、一貫した基準に基づく配列というわけではないが、詳細に調査すると著者の意図が浮かび上がってくる。配列の様相については、小峯和明氏が中国故事に関する話群を中心に分析を行っているが、小峯氏の言及のない部分を中心に、幾つかのグループに分けて配列の特徴を探っていききたい。

〈1〜12〉

『俊頼髓腦』の歌語注釈は、「おおよそ、歌は、神仏、帝后よりはじめ奉りて」（歌人の諸相）、「おほかた、歌を詠まむには、題をよく心得べきなり」（題詠論）、「おほかた、歌の良しといふは」（秀歌論）のような話題転換を明示する措辞のないまま、直前の風の名の話題に続けて、前掲「にほ鳥の」の歌及び「我が宿の早田刈りあげてにへすとも君がつかひを返しはやらじ」が唐突に引かれて始まる。なぜこれらの歌が最初に取り上げられたのだろうか。「にへす」という表現で想起されるのは、俊頼自身と隆源との次のような贈答歌である。

隆源阿闍梨七条房に、申べきことありてたび／＼まかりけるに、いた

はる事ありとてあはざりければ、かみさうじにかきつけ侍りける

こりはてぬにへのはつかりあさにするやどにもあらで人かへしけり

かへし
阿闍梨

はつかりのにへのひるげのつかなりとほかけずすべきいかゞかへさん

（『散木奇歌集』雑上・一二九五・一二九六）

この贈答は、『俊頼髓腦』に語られる「にへ」に関わる伝承を知らなければ解釈できない。この贈答の記憶が未だ新

しい時期に『俊頼髓脳』当該部分書かれたと考えると理解しやすい。詠歌の時期と『俊頼髓脳』成立の先後は不明であるが、一つの推論として示しておきたい。

続く2は、1の「には鳥」と鳥でつながる「鷹」に関わる話題である。末尾は「塚の下に埋みてけりとぞ、また人申しける。いづれかまことならむ」と結ばれ、同じく塚を話題とする3につながる。3と4は夢告により何かを知るという点で共通し、5は4と同じ鳥の話題である。5から6は敢えて言うならば鳥↓鼠という動物によるつながりか。6と7は、月↓雲の天象による関連であり、7の例歌の一首目に「月夜」の語が含まれるという関係もある。7から8は雲↓蜘蛛のつながり、9「錦木」項は8の後半の「木をすぢかへて」からの連想か。10の例歌の一首目は「錦木は立てながらこそ朽ちにけれ狭布の細布胸あはじとや」であり、9「錦木」項との関係は明白である。10と11は関係性が見出しにくい、10の例歌にも詠まれた錦木から松へという連想かと思われる。11と12は、11「(有間皇子が)まどひあるき給ひける」、12「(帝の末なりける人)が)まどひあるく」という類似点がある。

ここまでは、歌語そのものや注解の内容に基づく連想が配列の背景にあると見ることができている。『宇治拾遺物語』等の配列と近似した面があろう。

〈13～15〉

この三項目は、明神の祭礼における男女の契りに関わる風習という点で共通し、明確に一群を成している。ただし、前後の項目との関連を説明することは難しい。⁽⁶⁾

〈16～23〉

16・17の配列意図は不明確だが、18～22は男女関係に関わる伝承として一群と見なせる。続いて恋しい人に逢える予兆を話題とする22との関連で、23には婿が訪れない時に詠まれた姑の歌が配される。

〈24～44〉

以下、44までの配列に関する小峯氏の指摘の要点を示す。別表との照合がしやすいように、本稿において付した通し番号を付した。

23 「さくさめ」(姑) ↓24 「かぞいろ」(父母)・「いぎなみ」 ↓25 〈雄略〉・「しながどり」 ↓26 「山鳥」 ↓27 「山鳥」 ↓28 「時鳥」・〈約束不履行〉 ↓29 〈約束不履行〉・「かづらきの神」 ↓30 「あらぶる神」・「はらへ」 ↓31 「みのしろ衣」 ↓32 「はた」・「きぬ」 ↓33 「くれはとり」・「から衣」といった展開で、次に趙高二世の話がくる(〈〉は話題)。

33から34を引き出す契機は、「くれ(呉)はとり」 ↓「秦」の転換か、あるいは『後撰集』の贈答歌 ↓「拾遺抄」の贈答歌という連関か、あるいは「ふたむら山」の「二村」「二疋」の掛詞から34の例歌「かもをもをしと」の「鴨」「釘」、「駕」「惜し」の掛詞に思い及んだか。

34〜37は中国故事の連想であり、『蒙求』にちなむ話題のつながりがあつたとも言えるし、帝王と下臣との関係の在り方が一貫したテーマにもなっている。

37 「下和の玉」 ↓38 「玉箒」・〈志賀寺上人譚〉 ↓39 〈二夫にまみえぬ女〉・「雌燕」 ↓「つばめ」⁽⁷⁾ ↓40 「からす」・「なのり」 ↓41 「なのり」・「木のまる殿」 ↓42 「帚木」 ↓43 「しのぶもちずり」 ↓44 「芹摘み」。

〈45〜48〉

44の芹摘み説話と45の浦嶋子伝説の関連性は見出し難く、区切って考えるべきかと思われる。45〜47は、45に「みづのえの浦島とは、所の名なり」、46に「信濃国に更級の郡に、姨捨山といへる山のあるなり」、47には「甲斐国の風俗なり」「駿河国の「ふせり」といへる言葉なり」「佐夜の中山は、遠江国と駿河国との中にある山なり」とあるように、いずれも地方を舞台とした伝承や方言が話題となっている。47から48への接続は、敢えて言うならば共に「山」に関わるということであるが、むしろ47の方言の話題を承けて、48で「しなへたる」という奇異な語を取り上げたのではないだろうか。

〈49～52〉

48までは、歌語にまつわる逸話や伝承、和歌の詠歌状況が詳細に語られる傾向にあったが、49～52の四項目は49に詠歌状況の簡単な説明があるものの、いずれも難義語の語義のみをごく簡略に注している。前後とは一線を画する叙述方法であり、おそらく歌枕の類からの引用であろう。

〈53～67〉

このグループは別表から明らかなように、草や鳥獣に関わる歌語が並ぶ。類書分類による文献を参考にしている可能性が想定できる。64「蚊遣火」から65「飛火の野守」へは、「火」による連想も働いているのだろう。注釈の内容は様々で、65「飛火の野守」や67「そが菊・しがみさ枝・みさ枝」のように伝承や逸話を語る項目がある一方で、56「菅の根」及び58「もずの草ぐき」から63「ゆふつけ鳥」までは、ほぼ語義のみの簡略な注文が記される。

〈68～70〉

68・69は『日本紀竟宴和歌』、70は万葉歌を例としてあげており、このグループは古代の伝承としてまとめることができよう。

〈71～75〉

いずれも『古今集』乃至『後撰集』の歌をあげるが、71・75が『大和物語』、72・73が『伊勢物語』にも見られる歌であることに注目したい。また、71「これは、俊子が家に」、72「これは、芹河の行幸に、行平の中納言の」、74「これは、小野篁が」、75「これは、小野好古」という注文の冒頭の表現も類似しており、⁽⁸⁾一群を成すと認められる。

〈76～77〉

75と76は敢えて言えば、75に見られる「五位の上の衣」と76の例歌に詠まれる「干す衣」の関連がある。しかし、76の内容は68～75のような伝承や逸話と異なり、語義を詳細に検討したものと見なせる。前後とは区切るべきであろう。

続く77は注文を含まず、九首の例歌をあげ種々の船の名を示している。別表では一項目としたが、船の名をあげた一群と言える。

〈78～89〉

この一群は、歌語そのものの注釈というより詠歌方法を論じている。⁽⁹⁾別表の「前後の項との関連」の欄に示したように、いずれも和歌の内容に関して不審を表明した上で、歌の趣旨を解説し、和歌の詠み方として問題はないことを明らかにする。心情を強調するための誇張表現や掛詞による機知、擬人法、特徴的措辞が俎上に載せられている。

〈90～95〉

いずれも中国由来の故事を背景とした例歌を取り上げている。小峯氏はこの一群を「管仲老馬知・王質入仙・藐姑射山」とまとめ、「王質の斧の話と藐姑射山の話との間に別の仙人をめぐる歌注が入っている」と指摘する。確かに93「菊の露」、94「仙人の衣は縫目なし」はごく簡略な説明のみで典拠の故事が示されるわけではない。しかし、例に引く歌は異なるが『和歌童蒙抄』（第七・草部・菊⁽¹⁰⁾）や『色葉和難集』（巻八・きく⁽¹¹⁾のつゆ）は菊水の故事に言及する。また俊頼自身が『永久百首』（雑・仙宮・六二〇）で「たちぬはぬ衣の袖しふればみちとせへてぞ桃もなりける」と詠んでいる。俊頼としては93・94も含めて、広い意味で中国故事と関連する歌をまとめる意図があつたと考えたい。

〈96～101〉

96～98は『日本書紀』『万葉集』の歌を引く。99の出典未詳歌は『疑開和歌抄』『和歌童蒙抄』では『万葉集』所収とされ、『奥義抄』（中積・拾遺歌・三ざばへなす 付きといふこと、をしね／同・後撰歌・四十四いもせ 付うつし人）は99と101の例歌を「古歌」とする。100の例歌は『後拾遺集』所収歌だが、「月よゝみ」は『万葉集』由来の表現である。すなわち、この一群は古歌の歌語を問題にしたと見られる。

〈102～109〉

101と102の間に短連歌が集成されるが、鈴木徳男氏が論じている通り、短連歌集成の直前の101「貝すらも妹背そなふ」の内容と連歌の最後の一連「狩衣はいくのかたちしおぼつかな（中納言殿）／わがせこにこそとふべかりけれ（俊重）」が密接に関連しており、これを承けて「せこ」「つま」の語義の検討が始まっている。

102・103・104は意味・用法が複数ある歌語としてまとめられる。105は「あやめ」と「あやめ草」、106は「はちす」と「はす」という、やはり複数の詠み方が問題にされ、107は「いな船」の語義を二説あげる。102～107までは緩やかなまとまりを成していると見てよいだろう。108と109は男女の逢瀬に関わるという共通項はあるが、前者が「逢ふに身をかふ」が誇張表現であることを論じると共に「たにか」の語義を注しているのに対し、後者は簡略な語義説明のみであり、叙述方法は異なる。

〈110～116〉

中国故事を配した第三の話群として、小峯氏の言及がある箇所である。王昭君・長恨歌・呉松孝の逸話の叙述量の増大が著しいこと、歌語注釈ではなく歌全体の背景の説明であること、帝と后、下臣と女房といった宮廷をめぐる愛のテーマが浮き彫りにされていること、112の呉松孝から113の孔子の逸話への転換は今一つ明確ではないことなどが示されている。いずれも首肯すべき指摘である。

以下、小峯氏は113「人の心のほどを見るかな」↓114藤原実方が恋の相手の母娘の心をみる三日夜餅の話・「よどの」（夜殿）↓115「ふすみの床」↓116新枕と説明される。

114は、初婚ではない娘が実方と契ったことを責め、母親が娘をつねつたと聞き、実方が「三日の夜の餅は食はじわづらはし聞けばよどのには、こつむなり」と詠んだという内容である。「心を見る」という共通項で孔子の逸話と結び付けるより、夜床にまつわる話群である114～116は、前の中国故事話群と関係なく配されたと思なした方がよいように思う。

117も前の夜床関連話群とは関連性を見出し難い。114・115が後拾遺歌であったことと関係するか。117に「下り居の帝」とあることからの連想で、118「白雲の下り居る山」の歌が想起され、以下、内裏周辺で問題となった忌避すべき不吉な表現の話題が122まで続く。以後は歌人の逸話に移行するので、広い意味での歌語注釈はここまでとなる。

検討してきたように、歌語注釈の配列は説話集に見られるような緩やかな連想による連関が看取できる部分があると同時に、前後との結び付きはないものの共通の性格を有する一群が配される場合もあった。類書分類、出典の歌集ごと、いろは順などの統一的な規則性はないものの、全く無規律の配列というわけでもない。ある程度、著者の意図が探れる流れであると言えるだろう。歌枕類から引用したかのような語義説明のみの項目が続く一群があるなど、依拠した資料が配列に関係している部分もあると思われる。

二 和歌の出典と被注語の選択意図

歌語注釈の範囲で引かれる和歌は、短連歌集成部分の前（歌語注釈①）が一五九首⁽¹³⁾、後（歌語注釈②）が二六首である。出典を多い順に並べると以下のような⁽¹⁴⁾になる。

『万葉集』五〇首／『古今集』三五首／出典未詳二七首／『後撰集』一六首／『拾遺集』一三首／『後拾遺集』一一首／『古今和歌六帖』六首／『日本紀竟宴和歌』三首／『日本書紀』二首／『玄玄集』一首／神楽歌一首

他に、私家集一〇首（『散木奇歌集』一首を含む⁽¹⁵⁾）、物語六首、歌合四首という内訳である。

田仲洋己氏は、短連歌集成記事以前の引用歌が概ね万葉歌及び三代集時代の歌、更には出典未詳の古歌で占められるのに比して、短連歌集成記事以降は『後拾遺集』所収歌乃至は花山・一条朝以後の近代の歌人をめぐる説話が多いことを指摘している⁽¹⁶⁾。数値で示すならば、歌語注釈①では、三代集時代までの歌一五一首に対して、それ以降の歌は八首、歌語注釈②では、それが二〇首対六首（122の部分引用を含むと七首）となる。万葉歌五〇首中四八首、出典未詳歌二七首中二四首が連歌以前にあることから、歌語注釈①は主に古語を取り上げる意図があつたと見てよからう。

ともかくも『万葉集』所収歌が目立つて多く、出典未詳歌も大半は古歌と思われる。当時『万葉集』への注目が高まつており、取り上げる歌語の選択基準は、読者への教育的配慮と共に俊頼自身の関心に拠るところが大きいと見られる。なにより、俊頼自身に作例のある歌語の多さがそれを物語っている。

一例として13と15の明神の祭に関する話群を取り上げてみよう。15に引かれる「東路の道の果てなる常陸帯のかごとばかりも逢はんとぞ思ふ」の歌は、『奥義抄』では問答の「ひたち帯」項、『和歌童蒙抄』では服飾部帯項、『袖中抄』では「かごとばかりも ひたちおび」項、『和歌色葉』では「万葉古歌 付伊勢物語六帖近比歌」の「ひたちおび」項で取り上げられている。各書における被注語が「常陸帯」「かごと」であるから、当然の処置である。しかし『俊頼髓脳』は、13近江国筑摩明神の祭に関わる歌、14越中国鵜坂明神の祭に関わる歌に続いて当該歌をあげ、鹿島明神の祭について語っている。その祭に帯が関係することを説明するが、それが「常陸帯」だという文言はなく「かごと」に関する注文もない。どのような祭かを記すだけで終わっており、歌語注釈にはなっていないのである。

14で鵜坂明神の祭について述べた後に「たゞし、古き歌の見えねば、俊頼が歌をしぼし書いて候ふなり」とあるのも、考えてみれば奇妙であろう。この祭を詠んだ古歌はなく、自詠をあげたものの歌語について説明しているわけではない。つまり、和歌を学ぼうとする読者に対し、鵜坂明神の祭を紹介する必要はないのである⁽¹⁸⁾。

三箇所⁽¹⁷⁾の明神の祭に関する解説は、和歌の解釈と無関係ではないが歌語注釈を含まず、明らかに各地の明神の独特な

祭について語ることが眼目となっている。「常陸帯」や「かごと」という歌語について知りたい読者にとつては有益な情報とは言い難い。しかし、そもそも俊頼はそのような利用方法を想定していないのであろう。¹⁹⁾ 自分自身が明神の祭礼に関心があり題材としたからこそ13〜15を取り上げたのであり、読者も興味を持つ話題だと考えたのではないか。

ただし、別表で俊頼に作例のある歌語を太字にしたが、すべてが『俊頼髓脳』執筆以前に詠まれていたわけではない。

夕日さす野守の鏡かひもなしふれける風にかげしそはねば（『柿本影供記』）

『俊頼髓脳』成立後の元永元年（一一一八）六月十六日に藤原顕季邸で催された人麿影供での作であり、現在知られる限り『俊頼髓脳』所収の古歌に次いで古い「野守の鏡」詠である。歌題「水風晚来」を得て、「野守の鏡」の故事を用いることにより「水」の題意を間接的に表現しており、故事に寄りかかった詠と言える。

『俊頼髓脳』で取り上げた歌語を同書執筆後に詠んだ例は他にも少なくなく、『俊頼髓脳』執筆を契機として、従来関心を抱いていた歌語を実作に取り入れた場合もあったと思われる。

三 注説が依拠した文献と言談

続いて、俊頼が何に基づいて注説を執筆しているかを検討したい。書名を明記して諸書を引用する『袖中抄』などと異なり、『俊頼髓脳』では依拠資料を明示することは稀である。その中で、文献資料（和歌の出典を除く）を直接参照

したことを特筆している箇所として、4 「古き物に書きたれば」、19 「文にそらごとなき例」⁽²¹⁾、30 「日本紀に見えたり」、37 「承暦のたびの歌合」、44 「文書に献芹と申す本文なり」、61 「髓脳に鶯を百千鳥と書ける」、88 「文に申したれば」、89 「髓脳の物の名を巻を見れば」などをあげることができる。出典の歌集に関する言及で注意されるのは、38 「万葉集にも、ある本あり、なき本あり」、78 「もし古今の書き誤りかと思ひて、あまたの本を見れば」であり、俊頼がそれなりに豊富な文献を参看できる環境にあったことが知られる。

他にも書名を明記しないが文献資料に拠った記述があることは、既に諸先学により解明されているが、⁽²²⁾ここではより頻出する口説に基づく注解に注目したい。

『俊頼髓脳』に「うけたまはる」とある箇所は父経信からの口伝である可能性が高いことは、鈴木徳男氏が指摘する通りである。⁽²³⁾他に俊頼に直接語った話者が明確な例として、23 「匡房の中納言」、41 「盛房」、54 「実綱」の名があげられる。これらを含め、「とぞいひ伝へたる」「とぞ人申しける」「とぞいへる」などの文言によつて人から伝聞した⁽²⁴⁾知見を記した項目は、全体のほぼ三分の一に及ぶ。一つの被注語に対して複数の口伝を併記する場合もあり、また伝聞した内容をすべて肯定的に受け入れるわけではない。注意すべき例をいくつかあげてみたい。

・ 17 「たのむの雁」

……このごろ、ある人かやうのこと知り顔にいへる人あり。如何が申すとたづねしかば、東国に鹿狩するに、たのむの狩とて、かたみによりあひて狩をして、その日とりたる鹿をあるかぎり、むねとおこなひたる人に取りするなり。さて後の日、かたみごとにて互ひにするを、たのむの狩とはいふなりとぞ申すめる。されど、その心、この歌どもに叶はず。(中略)雁がねを詠めるところ聞こえたれ、鹿狩とは聞こえぬものを。

・25 「しながどり・みな野」

みな野は、津の国にある所なり。みな野といはむとて、しながどりととは続けることを人の尋ぬることにて、確かなることも聞こえず。昔、雄略天皇、その野にて狩し給ひけるに、白きかのしゝのかぎりありて、ゐのしゝはなかりければ、いひそめたるなり。しながどりとといへるは、白きかのしゝのかぎり捕られたればいゝ、みな野とはゐのしゝの無かりければいふなりとぞ申し伝へたる。射るに狩衣の尻の長ければ、土に狩衣の尻をつけじとて取れば、しかなりとは申す人もあり。それは見苦し。いづれの野山にかは、射むに狩衣の尻のつかざらん。

・53 「たまえ・なつかり」

…なつかりとは、はじめの五文字、雁がねの夏まであるをいふぞともいひ、鹿狩を詠むぞともいへる人もあり。みな僻事とこそ聞こゆれ。雁がねならば、末に群れる鳥といはんにも悪しく聞こえぬ。又鹿狩のにはかに出で来んも心得ず。これらが沙汰にこそ心得ぬ人、心得る人は見ゆめれ。

・58 「もずの草ぐき」

百舌鳥の草ぐきは、霞とぞ申す。見えたる事もなし。推し量り事にや。

17の「知り顔にいへる人」による鹿狩説が『袖中抄』によれば藤原基俊の説であることは鈴木氏、53の夏狩説が『隆源口伝』『綺語抄』に見えることは安井重雄氏が既に指摘している。⁽²⁵⁾

25で「見苦し」と批判された説は、『綺語抄』（坤儀部・野・しながどりみなもの）に見える。『俊頼髓脳』にも記される雄略天皇の狩の故事を引いた後に、以下のようにある。

またはしりながとりといふとなん。

射るとは、狩衣の尻をと敷いるものなれば、さといはんとてしりながとりといふともいふべし。(以下略)

『口伝和歌抄』(五) しながどり⁽²⁶⁾に「能因歌枕には二の義あり。一には六位の下がさねともいふ。二にはそうじて取るをいふといへり」、『袖中抄』(第七) しながどりのみの(に白鹿のみ獲るといふ説と狩衣の尻を取るという説について「此両義共に能因歌枕どもあげたれど」とあるのと関連がありそうだが、現存『能因歌枕』には下襲や狩衣に関する文言はない。

58 「もずの草ぐき」については、『奥義抄』(下巻余)が参考になる。

問云 鴟の草ぐきは何ぞ

答云、昔、男、野を行くに女にあひぬ。とかく語らひつきて、その家を問ふに、女、もずのゐたる草ぐきをさしていはく、わが家はかの草ぐきのすぢにあたりたる里にある也(中略)次の年の春、たま／＼ありし野に行きて教へし草を見るに、霞こと／＼くなびきてすべて見えず。ひねもすに詠めてむなく帰りぬといへり。是故将作のつたへ也。

「故将作」すなわち藤原顕季がもずの草ぐきとは霞であると言ったとは書かれておらず、「今ははや咲きにははなん桜花もずのくさぐさかくろへにけり」(『六条修理大夫集』一五一)を見ても、霞と解していたとは思われない。⁽²⁷⁾

一方、『袖中抄』(第一) もずの草ぐき(に「綺語抄云、もずの草ぐきといふは云々、大略同奥義抄、仍不書之」)「綺語・奥義の説」とあり、現存する『綺語抄』には釈文はないが、当時『奥義抄』と同様の内容が記された伝本が存在し

たらしい。

つまり、顕季や藤原仲実が『奥義抄』に見られるような説を採っており、俊頼がこれを伝え聞くにあたって誤解か誤伝が生じ、「百舌鳥の草ぐきは、霞とぞ申す」という聞き書きにつながったという推定が可能なのではないか。⁽²⁸⁾

以上の例は、事実誤認が想定される点もあるものの、同時代の言説に対し批判や疑問を提示したものと見ることができ。ただし、俊頼が『隆源口伝』や『綺語抄』を念頭に置いて反論したと主張したいわけではない。『俊頼髓脳』に伝聞表現が多出することからもわかるように、歌学書の記述は文献からの引用のみならず言談によることも大きい。同時代の他書に見られる注文は、著者の所論の提示であると同時に、当時そうした言説が存在したことの証しでもある。特定の先行文献を意識している場合もあると思うが、俊頼は周囲の歌人による歌語に関する言談を耳にし、それを明記した上で自説を述べようとしたのではないか。

『俊頼髓脳』歌語注釈部分からは、耳に入った諸説を広く集成して記録しようとする俊頼の姿勢が看取できる。⁽²⁹⁾ 佐藤明浩氏が述べるように、複数の説を提示したまま結論を示さない場合もある。⁽³⁰⁾ 一方で、同時代の他家の説が時にやや厳しい口調で批判されていることにも注意すべきであろう。父経信からの相伝に加え、家説の形成というほど鮮明ではなくとも、自説の優位性を示そうという俊頼の意識は確かにうかがえると思うのである。⁽³¹⁾

四 贈答歌の引用方法

最後に、贈答歌の引用方法について検討しておきたい。『俊頼髓脳』の歌語注釈部分には、以下の十組の贈答歌が引かれる。

・17 「たのむの雁」

み吉野のたのむの雁もひたぶるに君が方にぞよると鳴くなる

返し

我が方によると鳴くなるみ吉野のたのむの雁をいつか忘れむ（『伊勢物語』）
雲井にも声聞きがたきものならばたのむの雁も近く鳴きなん

返し

ことづてのなからましかばめづらしきたのむの雁に知られざらまし（『一条摂政御集』）

・18 「あもりのしるし」

忘るなよたぶさにつけし虫の色をあせなば人にいかに答へむ

返し

あせぬとも我ぬりかへむもろこしのぬもりも守るかぎりこそあれ（出典未詳）

・23 「さくさめのとじ」

いま来むと言ひしばかりを命にて待つに消ぬべしさくさめのとじ

返し

数ならぬ身のみ物憂く思ほえて待たるゝまでもなりにける哉（『後撰集』）

・33 「くれはとり」

くれはとりあな（や）に恋しくありしかばふたむら山も越えず来にけり

返し

唐衣たつを惜しみし心こそふたむら山の関となりけめ（『後撰集』）

・ 34 「鹿を馬といふ」

鹿をさして馬と言ひける人もあればかもをもをしと思ふなるべし

返し

なしといへばをしむかもと思ふらんしかやむまとぞいふべかりける（『拾遺抄』）

・ 38 「玉箒・ゆらく玉の緒」

初春の初子の今日の玉箒手にとるからにゆらく玉の緒

御返し

よしさらばまことの道にしるべして我をいざなへゆらく玉の緒

（万葉歌と出典未詳歌を贈答の形にする）

・ 71 「葉守の神」

我が宿をいつならしてか榎の葉のならし顔には折りにおこする

返し

柏木の葉守の神もましけるを知らでぞ折りしたゝりなさるな（『後撰集』）

・ 88 「いなご物妬みせず」

時しもあれ稲葉の風に波寄れるごにさへ人の恨むべしやは

返し

いかでかは稲葉もそよといはざらん秋の都のほかになすむ身は（出典未詳）

・ 108 「逢ふに身をかふ・たにか」

いたづらにたびく死ぬといふなれば逢ふにはなにをかへむとすらん

返し

死ぬくと聞くくだにも逢ひ見ねば命をいつのたにか残さん（『後撰集』）

これらが、歌語注釈を含む他の歌学書にはどのように引かれているかを次頁の表に示した。他の歌学書が、『俊頼髓脳』ほど贈答の形にこだわっていないことが看取できよう。

「みもりのしるし」「逢ふに身をかふ」項を除く八組は、贈歌か返歌いずれか一方のみをあげれば被注語について説明することができ、必ずしも贈答の形で引く必要はない。また、「たのむの雁」項の『一条摂政御集』の贈答は、「たのむの」かりが「狩」ではなく「雁」であることを主張するための証歌とされているが、『奥義抄』はこの贈答ではなく『俊頼髓脳』にも見える「坂こえて安倍のたのみにゐる鶴のともしき君は明日さへもがも」（『万葉集』巻十四・三五・一三）を引いて、「雁」説を補強する。一方『和歌童蒙抄』『和歌色葉』『色葉和難集』は同じく「雁」説に付くのだが、後撰歌のみで十分と考えているようである。

「みもりのしるし」項の贈答歌は出典未詳だが、贈歌返歌共に「みもりのしるし」という語を含んでいない。この語に言及する他の歌学書は、『俊頼髓脳』にも引かれる「脱ぐ杵の重なることの重なればみもりのしるし今はあらじを」（出典未詳）をあげており、確かに「みもりのしるし」という語を説明するための例としては、この歌のみで事足りる。しかし、みもりの血を妻の腕に付けるといふ特異な習俗をより具体的に詠んでいるのは贈答歌の方であろう。

『俊頼髓脳』では、「みもりのしるし」「鹿をさして馬といふ」「逢ふに身をかふ」項以外で、贈答歌をあげた後に詠歌事情が記されている。とりわけ「ゆらく玉の緒」項は、贈答の後ではなく返歌の前だが、京極御息所（藤原時平女襲子）への恋情に取り付かれた老法師の姿を描く志賀寺上人譚が長々と語られる。被注語を説明するのに必要な歌のみで

はなく、贈答の形で引くことを重視する『俊頼髓脳』は、詠歌事情、贈答にまつわる歌話を語りたがっているように見ることが出来る。

小峯和明氏は、志賀寺上人譚をめぐって「何より俊頼自らその話にとりつかれ、語りの魅力にひきずられていたとみるほかない」「明らかに俊頼は単なる歌の注釈から説話そのものの語りへ踏み出していたのである」と述べる⁽³²⁾。贈答歌引用箇所に限らず『俊頼髓脳』全体を通して、俊頼自身が「語りたい」という思いのままに説話を語っているのは間違いないであろう。褒子が醍醐天皇への入内の日に宇多院に奪い去られた逸話や、嵯峨后が「みそか事」を好んだという話柄は、和歌を学ぶために必要な知識ではない。

同時に、対読者意識があることにも注意したい。后がねの姫に向けて訓戒として示すということではなく、若い女性に関心を持つであろうという意図を見て取りたいのである。田仲洋己氏は、『俊頼髓脳』に男女の交情や密事に関わる話題が頻出することに関して、当時の宮廷社会におけるスキャンダラスな空氣に触発されたことに加え、撰閲家に対する期待と親和の念の裏返しのような形で、宮廷秘話や好色めいた話柄が書き付けられたと見立てている⁽³³⁾。説得力のある説だが、もつとシンプルに考えることもできるように思う。『源氏物語』をはじめとして女性たちに愛読された物語は、多くが男女関係を主題にし、宮廷社会に関わる秘事が語られるものも多い。田仲氏は、京極御息所をめぐる逸話の末尾にある「させることなけれども、かやうのことども、しろしめしたらんに悪しかるまじきことなれば記し申す也」との記述に対し、「取つて置きのお話をあなたに向かつてしましたよ」というニュアンスを看取している⁽³⁴⁾。そうした意識は、文言に表れていなくとも、各地の明神の奇祭や嵯峨后の色好みの逸話の背景にも認められるのではないだろうか。俊頼は、初学者に興味を持たせ自著を通読させるためにも、最初の読者である勲子の興味を引きそうな話題を取り上げ、自ら語りの魅力に引き込まれるまま存分に筆を揮ったのであろう。

結果的に『俊頼髓脳』歌語注釈部分は、詠作や和歌解釈に直接に関係ない、あるいは必ずしも必要ではない要素を少

なからず有することとなった。これは他の歌学書と異なる『俊頼髓脳』の独自性と言える。

おわりに

以上、『俊頼髓脳』の歌語注釈部分について分析してきたが、別表においてAとEに分類した注釈の内容に関しては、言及できないままに紙幅が尽きてしまった。また、今回は当該箇所全体像を明らかにすることを目指したため、個々の注説、依拠資料、俊頼の詠作との関係などについては更に詳細な考察が必要である。これらについては別稿を期したい。

しかし、ここまでの分析により『俊頼髓脳』の性格の一端を明らかにすることができたと考える。俊頼は父経信の口授を記録するだけではなく、同時代歌人の言説を批判した上で自説を主張することもあった。これは六条藤家や藤原基俊、同仲実らに対する六条源家の優位性を示そうとするものであり、忠実・忠通父子を意識した所為ではないだろうか。

一方で、和歌に直接関係ない話題も多く、むしろそうした話題が熱心に語られていた。従来指摘されてきたような説話そのものを語る魅力に取り付かれたという側面と同時に、若い女性の関心を引く読み物を目指したという面も認めたい。同時代には多くの歌学書が成立したが、『俊頼髓脳』ほど読者を意識した文言が含まれる著作は他になく、撰閲家当主に依頼されてその姫のために著したという執筆の契機は、『俊頼髓脳』の性格規定に大きく関与している。

更に、叙述のもととなつている様々な言説は、当時の歌人たちが古語や難義語について議論する場面が日常的に存在したことを示しているだろう。これは『俊頼髓脳』に限らず、『口伝和歌抄』『綺語抄』他同時代の歌学書の性格や関

係を考える上でも重要である。⁽³⁶⁾

広く和歌というものを学べるよう「式」も詠歌技法も歌語注釈も含む総合的歌学書たらんとし、初学者が興味を持つような工夫をし、大いに説話を語り、同時に自らの有する歌学の知見を撰関家にアピールする意図も含む——『俊頼髓脳』とはそうした著作なのであり、同時代の他の歌学書と一線を画する独自性を有するのである。

注

〈引用について〉

本稿における引用は以下の通りである。いずれも表記を改めた箇所がある。

歌学書は以下により、いずれも読みやすさを考慮して適宜漢字を当て濁点と句読点を付し、送り仮名を補い、漢字は通行の字体に変更した。

『俊頼髓脳』…冷泉家時雨亭叢書第79巻『俊頼髓脳』（朝日新聞社、二〇〇八年）により、注意すべき異同がある場合は、

頭昭本の本文を（ ）に入れて右傍に示した。頭昭本本文は俊頼髓脳研究会編『頭昭本俊頼髓脳（第一稿）』

（一九九六年／底本は京都大学附属図書館蔵『无名抄俊頼』）による。

『口伝和歌積抄』…冷泉家時雨亭叢書第38巻『和歌初学抄口伝和歌積抄』（朝日新聞社、二〇〇五年）

『綺語抄』…徳川黎明会叢書4『桐火桶・詠歌一鉢・綺語抄』（思文閣出版、一九八九年）

『奥義抄』…藏中さやか・黒田彰子・中村文編『奥義抄古鈔本集成』（和泉書院、二〇二〇年）所収慶應義塾図書館蔵『奥

義抄』

『袖中抄』…歌論歌学集成第4巻・第5巻（川村晃生校注、三弥井書店、二〇〇〇年）

私家集以外の和歌は『新編国歌大観』、私家集は『新編私家集大成』（濁点を付した）による。

『柿本影供記』は群書類従により濁点を付した。

(1) 同様の指摘は既に小野泰央「『俊頼髓脳』と同時代歌論書」（『中央大学国文』六四号、二〇二二年三月）、二三頁に見られる。

(2) 末尾の良暹の連歌に関する逸話については、田仲洋己『中世前期の歌書と歌人』（和泉書院、二〇〇八年）、七五―八五頁に詳しい。田仲氏は、この最終説話が後冷泉朝の頼通の世界の在り方を如実に伝えると共に、そこに欠かせない父経信の価値を保証していることを指摘し、更に俊頼が当該説話を記し留めた狙いとして、「経信の後継者としての自らの地位を強化するのみならず、『俊頼髓脳』の献呈先である撰閲家に対する父子二代に亘つての親昵ぶりをアピールすることでもあったのではなからうか」と述べる。『散木奇歌集』には、あたかも最終説話における良暹の行動及びそれを記した『俊頼髓脳』の筆致をなぞつたかのような詠歌が収められている（鈴木徳男『俊頼髓脳の研究』（思文閣出版、二〇〇六年）、一五五―一五六頁にも言及がある）。

堀川院御時、賀陽院殿におはしましける比、中宮御方の女房たちを、
花してかざりたるふねにのせさせ給てあそばせ給けるに、まゐりて
池のみぎはにさぶらふを、御らんじて、俊頼さぶらふめり、ふねよ
りさりぬべからんこといひかけよ、などおほせ事ありければ、みふ
ねよりたまはりたりける歌

君が代のはるかにほふ桜花こずゑにかけてちとせみえける

故源中納言おまへにさぶらひて、その岸ながらつかまつれ、とせめ
られければ、つかうまつれる

いへばげに花のみふねと見えるは君がちとせをつめる也けり

（『散木奇歌集』春・一〇一・一〇二）

飾り立てられた船に乗る人から求められ、汀にいる者が歌を詠みかけるといふ状況が一致するのみならず、傍線部①は『俊頼髓脳』の「良暹がさぶらふか」「ざりぬべからむ連歌などして参らせよ」、②は良暹の句「(こがれて) 見ゆる御船かな」と対応する。田仲氏は『俊頼髓脳』が本来『堀河百首』や『散木奇歌集』と併せ読まれるべき面を有していたことを示唆しているが、首肯すべきであろう。良暹の逸話と『散木奇歌集』前掲歌を並べてみれば、俊頼が自らを良暹、そして父経信の跡を襲うに足る人物として描こうとしていることが確かにうかがえる。これは、歌語注釈の執筆態度にも看取できる意識である。

(3) 藤原公任の『新撰髓脳』は、現状において脱落や錯簡があるものの、秀歌論・歌病論の後に実践的な詠歌理論を説く。『新撰髓脳』を参考にし更に内容を拡充させたのが『俊頼髓脳』であり、その総合性を取り入れつつ、より整理された形にしたのが藤原清輔の『奥義抄』だと言える。

(4) 俊頼の作例調査にあたり、小峯和明『院政期文学論』(笠間書院、二〇〇六年)、四四二―四四五頁、佐藤明浩『院政期和歌文学の基層と周縁』(和泉書院、二〇二〇年)、三二―三三頁、及び家永・小野泰央・鹿野しのぶ・舘野文昭・福田亮雄『俊頼髓脳』全注釈』(仮称、二〇二二年度刊行予定)のための注釈作業の成果を参考にした。

(5) 小峯『院政期文学論』、四三六―四三八頁。

(6) 『散木奇歌集』神祇部において、13に引かれる歌(八五六番)の直後に14の内容を踏まえた歌(八五七番)が配されており、『俊頼髓脳』の記述との間に相関関係が見られる(小野泰央氏のご指示による)。

(7) 小峯氏は「かぞいろはあはれと見らん燕すらふたりは人に契らぬものを」に関する注と「燕くる時になりぬと雁がねはふるさと恋ひて雲隠れ鳴く」の注を分けて捉え、「二夫にまみえぬ女・雌燕」↓「つばめ」と説明しているが、本稿では二首ともに燕は二羽目の相手を儲けないという話題で共通するため一連のものと解した。

(8) 73は72の「おきなさび」と関連する「老いらく」を取り上げ語義のみを注しており、いわば72の付けた項目のような性格である。前後の項目とは注文の形態が異なるのはそのためであろう。

(9) 87は歌語を問題にしているが、例歌における「高砂の尾上」の詠み方を不審とした上で、語義を検討し「咎なし」と結論づけており、この一群の他の項目と同様の論述方法と言える。89も歌語注釈と言えるが、79に「言高く昨日とは言ふなり」

とあるのと同様の表現を用い「歌は言高くのみ詠めば」と述べていることから、一連のものを見なしておきたい。

(10) 注文の内容は『芸文類聚』に拠るか。黒田彰子『和歌童蒙抄注解』（青簡舎、二〇一九年）、五七三頁参照。

(11) 『和歌童蒙抄』とほぼ同じ内容を「歳翹材文苑云」として引く。

(12) 鈴木徳男『俊頼髓脳』（短連歌作品集成）考』（『和歌文学研究』一一三号、二〇一六年二月）、三一―三三頁。なお、鈴木氏は100に引かれる「月よゝみ衣しでうつ声聞けば急がぬ人も寝られざりけり」も、夫婦の一方のいない孤独な嘆きを詠む歌として101と同列に捉える。稿者としては、前述のように96〜101を古代の歌語を問題とした一群と見なし、「中納言殿」（忠通）と俊頼男俊重の連歌に繋がるのは101のみと考えている。

(13) 54に二首引かれる内の後の歌「君が世はつきじとぞみる神風やみもすそ河のすまんかぎり」は（後拾遺集・賀・四五〇・源経信）は、定家本には見えない。定家本の誤脱と考え、ここでは顕昭本による歌数を示した。

(14) 例えば24に引かれる歌は『日本紀竟宴和歌』所収であるが、『俊頼髓脳』の記述は同書を典拠にしているとは言い難いことが、鈴木徳男氏により明らかにされている（鈴木『俊頼髓脳の研究』、八〇―八三頁）。別表にあげた出典はその歌がどの作品に採られているかを示しているが、俊頼が確実にその作品から歌を引いたもので主殿作ではない。

(15) 44で引かれる歌が『四条宮主殿集』に見えるが、古歌を引いたもので主殿作ではない。

(16) 田仲『中世前期の歌書と歌人』、七三頁。

(17) 『俊頼髓脳』は、藤原忠実の命により后がねの姫である勲子（泰子）のために著された書とされる（顕昭本巻末識語・『今鏡』すべらぎ中）。なお田仲洋巳氏は、勲子同母弟であり撰関家嗣子たる忠通が本書の真の読者であった可能性を指摘している。田仲『中世前期の歌書と歌人』、八六―九一頁。

(18) 他に鵜坂明神を詠んだ歌として知られるのは、後の例二首のみ（うち一首は俊頼男俊恵の作）。

(19) 梅田径「通読する歌学書、検索する歌学書」（早稲田大学総合人文科学研究所センター研究誌『WASEDA RILAS JOURNAL』二号、二〇一四年一〇月）において、『俊頼髓脳』は検索しながら読むのに不合理な構造であり通読することが想定されていたと思われること、後に検索性を高めるために目次を付した改変本が生まれたことが指摘されている。

(20) この歌会に関しては佐々木孝浩「六条顕季邸初度人麿影供歌会考」（『国文学研究資料館紀要』二二号、一九九五年三月）に詳しい。

- (21) これは、父経信の言葉と思しき「文書はそらごとせぬものなれば、さもあらん」(5に見える)を継承した考え方と言える。
- (22) 主な研究に小峯『院政期文学論』、鈴木『俊頼髓脳の研究』、岡崎真紀子『やまとことば表現論——源俊頼へ』(笠間書院、二〇〇八年)がある。
- (23) 鈴木徳男『俊頼髓脳』の中の経信——六条源家の歌学』(『和歌文学研究』一二〇号、二〇二〇年六月)、四頁。
- (24) 文献の記述を「とぞいへる」として引く場合もないとは言えないが、『俊頼髓脳』では「……とぞ人申しける。たゞ確かにみえたるところなし」……ぞ申す。みえたる事もなし」など口伝と文書を区別する姿勢が見られる。
- (25) 鈴木『俊頼髓脳の研究』、二〇一頁、及び安井重雄『藤原俊成判詞と歌語の研究』(笠間書院、二〇〇六年)、二二二—二二三頁。なお、「たのむの雁」については『和歌童蒙抄』(鳥部・雁)も鹿狩説を基俊の説とする。「なつかり」については『口伝和歌釈抄』(百二十一 なつかり)も夏狩説を採る。
- (26) ちなみに、『口伝和歌釈抄』の当該項に「師頼大納言などはいのしゝをいふといふ義は本文ありとの給へり」とあり、成立時期を考える上で注意される。師頼の大納言在任は天承元年(一一三一)十二月から保延五年(一一三九)十二月。ただし、同書の他の箇所では単に「師頼」とされ敬語も用いられていない。書写時の追記か。
- (27) なお、俊頼は伊勢滞在中に顕季に「とへかきな玉ぐしのはにみがくれてもずの草ぐきめぢならずとも」(『散木奇歌集』一三九五)と詠み贈つたが、これに対して顕季は「もずの草ぐきとはいかに知りてかく詠めるにか」と不審に思ったという(『奥義抄』下巻余「もずの草ぐき 付玉ぐし」項)。
- (28) 小川豊生氏は『俊頼髓脳』の「霞」説について、顕季の語つた物語を前提にして初めて生まれ得たものとし、「語られた出来事から今度のことばの新奇な意味(霞)をひき出してくる」と指摘する。小川豊生「院政期の歌学と本説——『俊頼髓脳』を起点に」(『日本文学』三六巻二号、一九八七年二月)、三頁。
- (29) これは『俊頼髓脳』のみの特色ではなく、『口伝和歌釈抄』『綺語抄』でも諸説の併記がまま見られる。
- (30) 佐藤『院政期和歌文学の基層と周縁』、五〇頁。
- (31) 同様のことは、67「そが菊」・76「河社」項でも指摘できる。
- (32) 小峯『院政期文学論』、四六三頁。
- (33) 田仲洋己『俊頼髓脳』再考』(『岡山大学文学部紀要』五六号、二〇一一年一二月)、三二頁。

(34) 同前、二四頁。

(35) 例えば似たような注説が複数の歌学書にある場合、文言の一致度が高い場合は別として、必ずしも一方から他方への、乃至は同一の典拠による書承関係の証左とはならず、共に言談の場から得た説という場合もあり得る。

【附記】 本稿は、家永・小野泰央・鹿野しのぶ・館野文昭・福田亮雄『『俊頼髓脳』全注釈』（仮称・二〇二二年度刊行予定）のための注釈作業において得た知見を取り入れた部分がある。共著者諸氏に深謝したい。

表

〈凡例〉

太字の見出し その歌語に関連する俊頼詠があるもの

「内容」欄の記号

- A 典拠説話・逸話・伝承に関する記載あり
 - B 典拠ではないが、詠歌条件・詠歌状況など詳細な説明あり
 - C 詳細ではないが詠歌条件の説明あり
 - D 詳細な語義説明
 - E ごく簡単な語義説明
- 網掛け 歌意の説明を含む（網掛けのみで記号がない場合は、歌意の説明のみであることを示す）

- *1 『口伝和歌釈抄』は出典未詳歌の一首を『万葉集』所収とする。
- *2 一首は『高光集』所収歌の異伝か。
- *3 『口伝和歌釈抄』『綺語抄』はこの歌の類歌を『万葉集』所収とする。
- *4 『疑開和歌抄』『和歌童蒙抄』はこの歌を『万葉集』所収とする。

		取り上げられた歌語		前後の項目との関連	内容
1	にへす・かつしか早稲	鳥（鳩鳥）		A	万葉・古今六帖
2	野守の鏡	鳥（鷹）／塚		A	出典未詳
3	鬼のこし草	塚／夢告		A	万葉二首
4	あさもよひ・いづなやむむみや	夢告／鳥（白き鳥）		A	出典未詳二首・万葉一首*1

22	眉根かく・鼻ひる	男女関係に関わる伝承（「恋しき人を見む」）	C	万葉二首
21	馬つまづく	男女関係に関わる伝承（「人に恋ひらるる」）	C	万葉
20	衣を返す	男女関係に関わる伝承（「人を恋ふる」）	C	古今
19	しづく	男女関係に関わる伝承（「人を恋ふる」）	B	出典未詳
18	みもりのしるし	鳥↓虫（みもり）／男女関係に関わる伝承	A	出典未詳三首
17	たのむの雁	鳥（雁）	A	伊勢物語二首・一条摂政御集 二首・万葉
16	たまきはる		B	万葉四首
15	鹿島明神の祭	明神の祭	A	古今六帖
14	鵜坂明神の祭	明神の祭	A	散木奇歌集
13	筑摩明神の祭	明神の祭	A	拾遺（伊勢物語にも）
12	いなむしろ	億計王・弘計王の逸話（「まどひあるく」）	A	日本書紀
11	結び松・たむけ草	錦木↓松／有間皇子の逸話（「まどひあるき給ふ」）	A	万葉五首・永承四年歌合二首
10	けふの細布	「錦木は…けふのほそぬの…」	B	後拾遺・古今六帖
9	錦木	錦木	A	出典未詳二首
8	くも手・八橋	雲↓蜘蛛／木をすぢかへて打つ	B	古今六帖・拾遺
7	とよはた雲・雲のはたて	月↓雲、あるいは月↓月夜	B	万葉・古今・重之集
6	月の鼠	鳥↓鼠	A	出典未詳二首 *2
5	郭公を鶯の子といへること	鳥（郭公）	A	万葉（引用なし）

41	木のまろ殿	地方の伝承・木（木のまろ殿）	A	神楽歌・出典未詳（後に金葉）
40	おほをそ鳥	鳥（鳥）／地方の伝承	A	出典未詳
39	燕、男二人せず	?／鳥（燕）	A	出典未詳・万葉
38	玉簪・ゆらく玉の緒	玉	A	万葉二首・出典未詳
37	血の涙	中国の故事が典拠（下和）／玉	A	古今
36	天の川の水上	中国の故事が典拠（張騫）	A	出典未詳
35	雁の便り	中国の故事が典拠（蘇武）	A	古今
34	馬を鹿といふ	中国の故事が典拠（趙高）	A	拾遺二首
33	くれはとり	布／呉	B	後撰二首
32	筑波嶺・新桑繭・みけし	布	D	万葉二首
31	みのしろ衣	正月ついたち／衣	B	後撰二首・出典未詳
30	さばへ	神（あらぎ神）／水無月つごもり	A	拾遺
29	岩橋・葛城の神	約束を違える／神（葛城の神）	A	拾遺
28	郭公と百舌鳥	鳥（郭公と百舌鳥）／約束を違える	A	寛平御時后宮歌合
27	山鳥の尾	鳥（山鳥）	B	万葉
26	をろのはつをに鏡かけ	鳥（山鳥）	A	万葉
25	しながどり・みな野	?／鳥（しながどり）	A	万葉二首
24	かぞいろ	姑↓父母	A	日本紀竟宴和歌
23	さくさめのとじ	婿が訪れない時	D	後撰二首

78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61
渡り果てねば	舟の名(例歌のみ)	河社	あけ	鄙・海人の縄たく	老いらくの	翁さび	葉守の神	五十串立て・髻華の玉蔭	下照姫	くかたち	そが菊・しがみさ枝・みさ枝	しみゝ	飛火の野守	蚊遣火	ゆふつけ鳥	百千鳥	放ち鳥・浜千鳥
つ の 姿 な り	舟↓川 ／心得られぬことなり…かやうのことは古き歌のひとつ	川↓舟 〈語義の詳細な検討〉	小野好古／大和物語	小野篁	伊勢物語	伊勢物語	大和物語	古代の伝承	古代の伝承	古代の伝承	草(菊)	草(秋萩)	火／草(若菜)	虫(蚊)／火	鳥(木綿付鳥)	鳥(百千鳥)	鳥(放ち鳥・千鳥)
	／	D	B	E	E	B	B	B	B	A	A	D	A	D	E	E	E
古今	古今	万葉七首・古今・伊勢物語	貫之集(古今六帖にも)二首 後撰	後撰	古今	後撰	後撰二首	万葉	日本紀竟宴和歌	日本紀竟宴和歌	拾遺	万葉二首	古今	古今・万葉	古今	古今・万葉	古今六帖・古今

95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79
貌姑射の山 無何有の郷	仙人の衣は縫目なし	菊の露	斧の柄朽つ	馬にまかせてゆく	歳寒くして松柏を知る	海人の釣り	いなご物妬みせず	高砂の尾上	風、花を惜しむ	いたくなわびそ	ゆきのうちに春・鶯の涙	きねがしらぐ	すみ(墨・炭)	さす(射す・差す)	磯の草	昨日こそ早苗とりしか
中国の故事が典拠(貌姑射の山・無何有)	中国の故事が典拠(天衣無縫)	中国の故事が典拠(菊水)	中国の故事が典拠(爛柯)	中国の故事が典拠(老馬智)	中国の故事が典拠(歳寒然後知松柏之後彫也)	歌は言高くのみ詠めば	歌の心、聞かざらむ人のさとるべきにもあらず	この歌の心をもて尋ねれば：咎なし	思ひかけぬ事なりや：ひとつの姿なり	あいなくこそ聞こゆれ：歌のならひなれば	おぼつかなし：咎なし：なほ沙汰残りたる	いかなる事にか：咎なし	いかなる事にか：咎あるべからず	心得がたし：などか名ばかりをもさゝざらむ	ひが事とも申しつべし：めでたくこそ聞こゆれ	おぼつかなし：かやうに心得つれば、何事もやすくなりぬ
E		D	A	A	A	D	D	D								
万葉	古今	古今	古今六帖	後撰	古今	出典未詳	出典未詳二首	後撰	道信集	古今	古今	拾遺	拾遺	拾遺	拾遺	古今

112	111	110	109	108	107	106	105	104	103	102		101	100	99	98	97	96
呉松孝(紅葉題詩)	楊貴妃	王昭君	みとのまぐはひ	逢ふに身をかふ・たにか	いな船	はちす	あやめ草	下紐とく	あやなし	せこ・つま	(連歌)	貝すらも妹背そなふ	月よゝみ	たのき・さい・おしね	餓鬼・女餓鬼	千引の石	蜘蛛のふるまひ
中国の故事が典拠	中国の故事が典拠	中国の故事が典拠	〈簡略な語義説明のみ〉	心も得ぬ…よくいひとらむとて詠めるなり	「いな船」の二説	「はちす」と「はす」	「あやめ」と「あやめ草」	またさだめなし(多義あり)	ともかうも申すべきにや(二義あり)	さだめもなし(二義あり)	末尾「わがせこにこそとふべかりけれ」	古代の歌語?	古代の歌語	古代の歌語	古代の歌語	古代の歌語	古代の歌語
A	A	A	E	E	D	D	D		D	D	/		E	E		E	A
出典未詳	玄玄集	後拾遺二首	出典未詳	後撰二首	古今	古今	古今・後拾遺	古今二首・後撰	古今	万葉二首・古今・伊勢物語・和泉式部集		出典未詳	後拾遺	出典未詳 *4	万葉二首	万葉	日本書紀(古今(墨滅歌)にも)

122	121	120	119	118	117	116	115	114	113
下燃えの煙	雲隠る	たまのみどの	夢後郭公	下り居る	むなしき船	新枕	かるも	三日夜餅	孔子と顔回
内裏周辺（郁芳門院）での不吉な表現	内裏周辺（白河天皇中宮）での不吉な表現	内裏周辺（堀河天皇中宮）での不吉な表現	内裏周辺（堀河天皇）での不吉な表現	下り居る山／内裏周辺（醍醐天皇か）での不吉な表現	下居の帝	床↓枕（新枕）	床（ふすみの床）	床（夜殿）	中国の故事が典拠
B	B	B	B	B	A	B	D	B	A
和歌一部のみ	和歌なし	和歌なし	和歌なし	大和物語所収歌の記憶違いか	後拾遺	伊勢物語	後拾遺	後拾遺	出典未詳